

文学に見る人と川のかかわりに関する調査研究

STUDY ON RELATION BETWEEN RIVER AND PEOPLE IN VIEW OF LITERATURE

研究第一部 主任研究員 川井 正彦
研究第一部 部長 森川 一郎
研究第一部 主任研究員 椎名 真悟

稲作を中心とする生活を営んできた我々日本人は、五穀豊穡の恵みを与えるものとして、川に感謝するとともに、頻発する洪水への恐怖から、川を畏怖の対象としてとらえ、敬ってきた。また、山紫水明の豊かな情景は、古くより、多くの文人に好まれ、和歌や俳句といった文学に表現されてきた。

本調査研究は、和歌や俳句の整理を通じ、近畿地方、中部地方および東北地方を対象として、かつての川の姿や人と川との関わりに関して考察したものである。この結果、和歌・俳句に詠みこまれている川は、かつての豊かな自然環境や生活と密着した河川の姿を浮かび上がらせた。それは我々が現在取り組んでいる、自然再生や川に学ぶ社会の実現などといった、大きな課題と根底を一つにするものと言えよう。

キーワード：日本文学、和歌、俳句、歌枕

We Japanese who have led life centering on rice farming have been thanking to the river as a thing which gives blessing of fertile staple. On other side, Japanese were afraid the river from the fear of the flood which occurred frequently. Moreover, the rich and beautiful scenery has been expressed by many literary person from ancient times at literature, such as a 31-syllable Japanese poem, waka and a haiku poem.

This study focuses on the figures of the rivers in ancient times and relation between men and the river, through the consideration of the Japanese waka poems and haiku poems, particularly in the Kinki region, the Chubu region and the Tohoku region.

Consequently, the rivers which waka and haiku poem express made the figure of once rich natural environment and the rivers sticking to the life of men emerge. This can be said to form a common basis for major issues that we are working on today, for example, social development that learns from natural regeneration and rivers.

Key Words : Japanese literature, Japanese poem, haiku, and utamakura (a place of poetical association)

1. はじめに

我々日本人は、古代より稲作を中心とする生活を氾濫の危険を包含する沖積低地で営んできた。このため、川は豊かな恵みをもたらせてくれる感謝の対象であるとともに、古くより畏怖の対象でもあった。

また、山紫水明の美しい風景や豊かで清冽な水の流れる川は、人々の憩いや遊山の場であるとともに、不浄の物を流し清める場でもあった。

このような日本人の川とのつながりは、現在まで脈々と受け継がれている伝統的な年中行事や祭りなどに垣間見ることができ、また、和歌や俳句をはじめとする多くの文学作品にその姿を見出すことができる。

本報告では、近畿地方、中部地方および東北地方で実施した川に関わる文学の調査をもとに、かつての川と人との関わりについて紹介する。

2. 川の和歌・俳句(歌枕になった川)

日本の河川は、その国土の形状を反映して、欧米などの諸外国に比べ、極めて多くの小さな水系が存在している。これら水系の中には、古代より、その風景が愛され、著名な歌人により詠まれたもの、多くの旅人の苦労を反映して詠まれたものなど、特に多くの和歌や俳句が残されているものがある。このように和歌に多く詠まれている有名な地名を「歌枕」と呼んでいる(厳密な定義ではないが)。

このような多くの歌人・俳人に愛された「歌枕」を足がかりとして、川の和歌・俳句を整理した。

2-1 和歌・俳句に見る近畿地方の川

近畿地方は、古代より都がおかれさまざまな和歌や俳句が残された地域であり、川に関わる和歌や俳句だけを取り出してみても、その量は膨大であり、完全に整理することは不可能であるとさえ言えよう。

そこで、ここではいくつかの歌枕をもとに、代表的な和歌・俳句を抜き出して紹介する。

<歌枕「飛鳥川・明日香川」>

『万葉集』において、実在する河川で最も多く詠まれたのが、この飛鳥川(明日香川)であり、そう言った意味でも、『万葉集』を代表する河川と言える。また、万葉人にとっての飛鳥川はわざわざ旅をして禊(みそぎ)や遊楽に訪れる川と違い、飛鳥の地において朝夕慣れ親しんだ里の川と言え、藤原京(694年～; 橿原市)、平城京(710年～; 奈良市)と都が飛鳥を離れていっても懐かしく思う川であったと考えられる(吉野川等に比べると職業歌人や貴族の歌に比べ、読人不知の歌が多く見られることから推測できる)。

『万葉集』では、揺れ動く「川藻」を人の心の例えとして使った恋愛感の比喻や、流れる水の早さから時間の移ろいの比喻に使われていたが、平安時代になると『古今集』に見られるように、速い川の流れによる瀬淵の変化から「人の世の無常感」や、「人の心の移ろいやすさ」を詠むことが多くなった。この傾向は後年の『枕草子』や『徒然草』にも引き継がれ、人の世の無常を詠嘆する作者たちに格好の材料を提供している。

・明日香川 しがらみ渡し 塞(せ) かませば流るる水も のどにかあらまし(万葉集 柿本人麻呂)
(意: 明日香川に柵(しがらみ)を渡して、流れる水を塞き止めたら、流れ去る水(皇女の遠ざかること)も、ゆるやかになるにちがいないのに。)

・世の中は 何か常なる 明日香川 昨日の淵ぞ今日は瀬になる(古今集 読人不知)

(意: この世の中でいったい何を不変なものとなし得ようか。「明日」という名を持つ明日香川でさえ、昨日淵であったところが、今日は瀬となり、移ろいゆくのだから。)

・あすか川 定めなき世を いとはねば 淵にも瀬にも 宿る月影(拾玉集)

(意: 移ろいゆく明日香川のように「定めなき世」とわりきってしまえば、淵に映る月も瀬に映る月もおなじように美しく、人生それなりに趣があるものだ。)

<歌枕「宇治川」>

宇治川を歌に詠む場合「網代」を景物として詠み込むことが多かった。この網代とは、冬に竹や木を編んだものを網を引くような形に立てて、その終端に簀(す)を設けて氷魚(鮎の稚魚)を取るように仕掛けたもので、都人にとっては物珍しかったのであろう。

・もののふの 八十(やそ) うち川の 網代木に いさよふ浪の ゆくへ知らずも(万葉集 柿本人麻呂)

(意: 宇治川の網代木にただよいつづける川波のように、多くの人々の行末ははかりがたい。)

・宇治川の 瀬々にありてふ 網代木に 多くの日をも わびさするかな(古今六帖)

(意: 宇治川の瀬々にあるという網代木によって多くの氷魚につらい思いをさせているのと同じで、「憂し」(宇治とかけている)ということは人生に多く、日々をつらい思いで過ごしていることだ。)

<歌枕「大堰川」>

現在の桂川の部分名である。川に堰を設けて流れを調節していたためその名がついたとされている。紅葉

や鶴飼の名所として知られ、多くの歌に詠まれるとともにるとともに、丹波から木材を輸送していた筏も詠み込まれることが多かった。

・色々の 木の葉流る 大堰川 しもは桂の 紅葉とや見む (拾遺集 壬生忠岑)

(意：様々な色の木の葉が流れる大堰川の下流には、桂の紅葉が見えている。)

・大堰川 浮かべる舟の 篝火に をぐらの山も 名のみなりけり (後撰集 在原業平)

(意：大堰川に浮かんでいる舟の篝火に明るく照らされて、小倉山も「暗い」とは名ばかりだ。)

・大堰川 くだす筏の みなれぎを みなれぬ人も 恋しかりけり (拾遺集 読人不知)

(意：なかなか逢えない人が恋しい(「みなれぎを」は「水馴れ棹」のこと。「みなれぬ」と続けるための序詞)。筏で下る人の姿は大堰川の代表的景物であった。)

<歌枕「鴨川・賀茂川」>

平安京の洛中を流れていたため、当時の都人の生活と密着していた川である。しかし、当時はしばしば氾濫を起こし、平家物語では白河院が思い通りにならないものの筆頭として「賀茂川の水」を挙げているほどである。和歌では六月祓(みなづきばらえ：夏祓ともいう)がよく詠み込まれた。また、川原の千鳥を詠むことも多かったようである。

・賀茂川の 水底澄みて 照る月を 行きて見むと や 夏祓へする (後撰集 読人不知)

(意：賀茂川の澄んだ水底に照る月を見に行くということで、夏祓えをするのだろうか。)

・褌せし 賀茂の川浪 たちかへり 早く見し瀬に 袖は濡れきや (千載集 斎院中将)

(意：褌をした賀茂川の川波が返ってきて、袖をぬらすように、昔の思い出が思い出され、泣いてしまった。)

・明けぬなり 賀茂の川瀬に 千鳥なく 今日もは かなく 暮れむとすらん (後拾遺集 円昭)

(意：夜が明けようとする賀茂川の川瀬に千鳥が鳴いている。今日もはかなく日を過ごしてしまうのか。)

<歌枕「井手玉川」>

多くの和歌に詠まれた「六玉川」のひとつで、現在の京都府綴喜郡井手町を流れ、木津川に注ぐ河川。本歌(一番上の歌)の影響が大きく、「蛙(かはづ)」や「山吹」が多く詠まれている。

・かはづなく 井出の山吹 散りにけり 花のさかりに あはましものを (古今集 読人不知)

(意：蛙(カジカ)の鳴いている井手の里の山吹はもう散ってしまった。そうと知っていたら、もっと早く訪ねて来て、その花盛りに出会いたかったのに。)

・玉川の 岸の山吹 影見えて 色なる浪に 蛙鳴くなり (後鳥羽院集)

(意：玉川の岸辺の山吹の影が映って色がついたような波が立っている中、蛙の声が聞こえている。)

<歌枕「淀・淀川」>

宇治川、木津川、桂川が合流しているあたりは川幅が広くなり、水が淀んでいるように見えることから当時は淀と呼んでいた。和歌では「淀む」にかけて深い意と掛けて用いられたり、水生植物である「若薦(わかこも)」や「あやめ」、「川霧」などが詠み込まれることが多かった。

なお、当時の淀川下流部は大阪湾に向かって広がったような流路を取っており、湿地が広がっていた(杜若の名所である「浅沢小野」に代表される)。この下流部は「難波江」、「難波潟」とよばれ、淀川とは呼ばれていなかったようである。

・山城の 淀の若薦 刈りにだに 来ぬ人たのむ 我ぞはかなき (古今集 読人不知)

(意：遊びの心でも良いから訪ねて来てほしい。まったく訪ねて来ない人を頼りにしている私は、なんとはかない存在だろう。)

・淀川の 淀むと人は 見るらめど 流れて深き 心あるものを (古今集 読人不知)

(意：淀川が淀んでいるように、私があるあなたを訪ねて来ないようには思いますが、淀みにも緩やかな流れと深みがあるように、私にも深い心があるのですけれども。)

<歌枕「芥川」>

今の大阪府高槻市を流れる河川。古くより文学の世界で取り上げられてきたが、主に「飽きる」と掛けた表現が多い。なお、芥川を文学の世界で有名にしたのは『伊勢物語』第六段の駆け落ちの物語であり、芥川が都から逃げ延びる境界の場所として描かれている。

なお、芥川については、上記のように摂津とする説と内裏の塵芥を流す川とする説もある。

・人をとく あくた川てふ津の国の 名にはたがはぬ ものにぞありける (承香殿の中納言)

(意：津の国の芥川ではありませんが、あなたはすぐに人を飽きてしまうお方として有名です。その評判にたがわぬお方だということがよくわかりましたよ。)

・月影に 我をみしまの 芥川 あくとや君がおと

づれもせぬ (古今六帖)

(意：月の光で私の顔をご覧になってしまったので、あの人はもういやになってしまったのか、訪ねて来てくださらなくなってしまった。)

<歌枕「吉野川」>

『万葉集』では清浄な川という詠まれた方が主であったが、『古今集』の時代になると、吉野川の激流に心情の激しさを喩えた歌が多くなった。さらに平安時代の中期になると、吉野山の景物の桜が吉野川に流れてきたという形で詠まれるようになった。

・吉野川 ゆく瀬の早み しましくも よどむことなく ありこせぬかも (万葉集)

(意：吉野川は瀬の水が早く流れて行き、少しの間も淀むことがない。私たちの仲もそうありがたいものだ。)

・吉野川 岩浪高く ゆく水の はやくぞ人を 思ひそめてし (古今集 紀貫之)

(意：吉野川の岩にぶつかり、高く波を上げながら、流れる水の速さように、あの人を思い染めるのは早かった。)

・浪もせに 流れもやらず 吉野川 おのがかけたる 花の柵 (しがらみ) (後鳥羽院集)

(意：吉野川の波が水面一面に広がるほどに、花が一面に散って柵のように、水を塞き止めているようだ。)

2-2 和歌・俳句に見る中部地方の川

中部地方の河川に関する和歌・俳句については、伊勢神宮とその周辺に関するものを除くと、いわゆる古歌は少なく、鎌倉時代以降を待たなくてはならなくなる。したがって、歌枕として成立しているものは近畿地方に比べると少ない。

しかし、東海道や中山道といった街道が整備された江戸期以降は旅人の往来を反映して、多くの文人たちが和歌や俳句を詠んでいる。

<歌枕「宮川」「五十鈴川」「御裳濯 (みもすそ川)」>

伊勢神宮への参拝者は、内宮の境内を流れているこの川の岸にうづくまり、川水に手を差し入れて洗った後、参拝した。すなわち、この川はいわゆる俗世界と聖域との境界を意味する川であった。

したがって、和歌では神をたたえる気持ちとともに詠まれることが多かった。

また、流れる水の清冽さ、水量の豊富さから、「永遠」なるもののたとえとして使われることも多かったようである。

なお、御裳濯川は倭姫命がこの川で裳裾の汚れを濯いだとの伝承にもとづく、五十鈴川の別称である。

・宮柱 下つ岩根の 五十鈴川 よろず代すまむ末ぞはるけき (五社百首)

(意：神宮の御柱を支える岩のある五十鈴川は、永遠に澄んでおり、はるか遠くまで流れて行く。)

・君が代は 久しかるべし わたらひや 五十鈴の川の 流れ絶えせで (新古今集 大江匡房)

(意：度会の五十鈴川の流れが絶えることがないように、わが君の御代は長く続くことだろう。)

・君が代は つきじとぞ思ふ 神風や 御裳濯川の 澄まむ限りは (後拾遺集 源経信)

(意：わが君の御代は、御裳濯川の澄んでいる限りは、永遠に尽きることなく続くのだ。)

<鈴鹿川>

都から伊勢神宮に参る都人にとって、伊勢神宮に参拝する旅程のおよそ半分の位置にある鈴鹿川は、『万葉集』では「八十瀬 (やそせ)」と表現され、数多くの瀬を持つ川として詠まれている。その後の和歌においてもこの表現は変わらず、多くの歌でこの表現が用いられている。

・鈴鹿河 八十瀬渡りて 誰がゆゑか 夜越えに超えむ 妻あらなくに (万葉集 読人不知)

(意：妻もいないのに、誰のために、苦勞して鈴鹿川の多くの瀬を渡って、夜越などしようか。)

<長良川・揖斐川>

かつての木曾三川の下流部は、三川が蛇行し絡み合いながら伊勢湾に流下しており、現在のように分流された整然とした姿ではなかった。このため、13世紀の紀行文『うたたね』では「洲俣 (すのまた) とかや、ひろびろとおびた、しき河あり。……この国になりては、大きな川いと多し。」などと書かれるのみで、川の情景を詠みこんだ和歌についてはほとんど見られない。

また、東海道が整備された江戸期以降の旅人は、熱田の宮から桑名への渡し舟 (七里の渡し) を用いるのが主で、舟に弱い人は佐屋街道を通して桑名に出る渡し舟 (三里の渡し) を用いていた。このため、木曾三川の下流部では川の情景を詠みこんだ和歌や俳句は少ない。

一方、長良川や揖斐川の中・上流部では、鶺鴒や養老の滝などの景物を詠みこんだ和歌や俳句がいくつか見られる。

・曙や 白魚白き こと一寸 (甲子吟行 芭蕉)

(意：夜が明けはじめるころ、まだ薄暗い桑名の河岸の浜で白魚漁を見た。)

- ・田跡 (たど) 川の 滝を清みか いにしへゆ 宮
仕へけむ 多芸 (たぎ) の野の上 (へ) に (万葉
集 大伴家持)

(意：多芸野のほとりの田跡川の激流が清らかだから、昔から長く宮として人々は仕えて来たのだろうか。)

- ・おもしろうて やがて悲しき 鶺鴒かな (芭蕉)
(意：謡曲の「鶺鴒」を下地にした句。はじめは楽しいものだが、やがて物悲しさを感じ、寂しい帰路となってしまうものだ。)

<木曾川>

木曾川もその下流部は上述の長良川、揖斐川と同様に、あまり和歌や俳句には表現されなかった。しかし、その上流部は、深い木曾川の渓谷沿いに旅をすることから、川の情景を詠った多くの和歌や俳句が詠まれている。特に、木曾川沿いの絶壁に沿って設けられた、木曾の棧 (かけはし) は著名で、古くより多くの和歌や俳句に詠み込まれている。

- ・水鶏 (くいな) 啼くと 人のいへばや 佐屋泊り
(笈日記 芭蕉)

(意：水鶏が鳴くのでその声を聞いて言っただけですとわれ、つい、佐屋 (木曾川下流、愛知県海部郡佐屋町) に泊まることにした。)

- ・なかなか いひもはなたで 信濃なる 木曾路
の橋の かけたるやなぞ (拾遺集 源頼光)

(意：はっきりと言いつけられないで、信濃にある木曾路の棧橋のように、なまはんに思っただけをかけているのはどうしてだ。)

- ・波とみゆる 雪を分けてぞ こぎ渡る 木曾の
かけはし 底もみえねば (山家集 西行)

(意：波のように見える雪を掻き分けて進む木曾の棧橋では、雪が積もって底も見えない。)

- ・棧や 命をからむ 鶯がずら (更科紀行 芭蕉)
(意：木曾路の棧橋では、まるで自らの命を惜しむように、鶯が十重二十重にからみついている。)

<矢作川>

江戸期以前では、矢作川そのものを詠った和歌や俳句は、多くは無いが、矢作川に架かる「矢矧橋」は著名で、多くの和歌や俳句に詠み込まれている。この橋は、シーボルトの「江戸参府紀行」ではケヤキとヒノキで造られた208間 (374m) の橋であったとされている。

- ・短夜に 矢矧の橋は なお長し (許六)

(意：夏の短い夜であれば、矢作川にかかる矢矧橋は、なおのこと長く感じる。)

<大井川>

東海道の難所として知られる大井川は、東海道が整備される以前から、さまざまな形で詠み込まれてきた。また、街道の整備後はさまざまな和歌・俳句の中に、その名を見出すことができ、当時の人が如何に苦労して渡河したかを偲ばせる。

なお、これら渡河の様子は『東海道五十三次』などの浮世絵に生き生きと描かれている。

- ・思い出づる 都のことはおほみ河 いく瀬の石の
かずも及し (十六夜日記 阿仏)

(意：都での思い出は多く、大井川のいくつもの瀬にある石の数も及ばない。)

- ・さみだれの 大井越えたる かしこさよ (蕪村)

(意：五月雨の続く中、増水の大井川を川留めにならぬうちに越えておいて、本当によかった。)

- ・馬方は しらじしぐれの 大井川 (芭蕉)

(意：あの馬方は時雨の大井川を越えた私の苦労など知るまい。)

<天竜川>

先の大井川と異なり舟で渡河した天竜川では、その流れの速さが詠われている。

- ・水の泡の 浮世に渡る 程を見よ 早瀬の小舟
棹も休めず (十六夜日記 阿仏)

(意：水の泡のようにかかない浮世を渡っていくように、天竜川の瀬にさしかかった渡し舟は、棹を休めることなく漕ぎ渡っていく。)

- ・水上は 雲より出て 鱗ほど なみのさかまく
天竜の川 (東海道中膝栗毛)

(意：天竜川は、雲のように高い山から流れ出て、鱗のように波が逆巻いている。)

2-3 和歌・俳句に見る東北地方の川

都から遠く離れた東北地方は、意外にも多くの歌枕が残された地域である。これは、都を遠く離れていたがゆえに、多くの歌人の心を惹き付けた結果とも言えよう。ただし、これら歌は、実際にその地を訪れずに、想像で詠まれたものも多いようである。

<歌枕「衣川」>

奥州藤原氏の拠点として栄えた平泉を流れる衣川は、前九年ノ役・後三年ノ役などの古戦場でもあり、古くより多くの和歌に詠まれてきた。

- ・身に近き 名をぞ頼みし 陸奥の 衣の川と 見
てや流れむ (古今六帖 紀貫之)

(意：体にまとう「衣」という名を持つために親しくなれそうだと期待していた陸奥の衣川 (女性にたとえている) ではあるが、実際に見てみると泣かれ

(「流れ」とかけている)てくるよ。)

・とりわきて 心もしみて さゑぞわたる 衣川
みにきたる けふしも (山家集 西行)

(意：衣川を見にきた今日は、雪が降って寒い上に、特に心に寒さがしみることだ。)

<北上川>

北上川そのものの歌は、それほど多く詠まれてはいないが、近現代の和歌・俳句を含めると、北上川流域を故郷とする石川啄木がその郷愁とともに詠み込んでいる。

・やわらかに 柳あをめる 北上の 岸辺目に見ゆ
泣けとごとくに (一握の砂 石川啄木)

(意：北上川の岸辺の柳が、ゆるやかに緑を濃くしていくさまが、「泣け」とでも言うように思い出される。)

<歌枕「最上川」>

最上川は、古代(平安前期)には既に舟運の盛んな河川として知られており、「稲舟」と呼ばれる川舟が行き交っていた様子が詠われている(古歌では、最上川が詠まれたのはこの「稲舟」と「否」を掛詞として用いたものが多い)。

その一方、最上川は急流としても知られており、芭蕉の著名な句ももともとは「…あつめて涼し…」と詠んだものを後にその急流に驚き、「…あつめて早し…」に改めたということが良く知られている。

また、その流域が山形県土の80%を占める最上川は、山形出身の近代の歌人斎藤茂吉によっても多くの和歌が詠われている。

・最上川 上れば下る 稲舟の いなにはあらず
この月ばかり (古今集 読人不知)

(意：この最上川を上ったり下ったりしている稲舟になぞらえて「否」というわけではございませんが、今月だけはどうしても都合が悪いのです。)

・五月雨を あつめて早し 最上川 (芭蕉)

(意：流域に降った五月雨を集めて最上川が激しく流れている。)

・最上川 いまだ濁りて 流れたり 本会海に 舟
帆をあげつ (斎藤茂吉)

(意：最上川がまだ濁りながら流れているが、本会海の船着場からは帆を揚げて舟が出て行こうとしている。)

<歌枕「阿武隈川」>

阿武隈川も最上川と同様、古くから和歌に詠み込まれてきた川である。しかし、情景を詠み込んだものは意外に少なく、「あぶくま」の「あぶ」と「逢う」を掛けた表現で用いられることが多かった。

・阿武隈に 霧たちわたり 明けぬとも 君をばや
らじ まてばすべなし (古今集 読人不知)

(意：阿武隈川に霧が立ち渡って、夜が明けたとしても君を帰すまい。また来るのを待つのはやりきれないのだから。)

・人知れず 濡れにし袖の 乾かぬは 阿武隈川の
水にやあるらむ (古今六帖 紀貫之)

(意：人に知られずに濡らした袖が乾かないのは、あなたに逢えないからだ(「阿武隈」と「逢う」を、「水」と「見ず」をかけている。)

・つばくらめ ちゝと飛びかひ 阿武隈の 岸の桃
の花 今さかりなり (若山牧水)

(意：つばめが飛び交う阿武隈川の岸の桃の花は、今が盛りだ。)

3. 和歌・俳句に見る川の姿

ここでは、川に関わる和歌・俳句の整理から読み取れるかつての川の姿と人との関わりについて、記述する。

3-1 かつての川の姿

万葉の時代の古歌から近代の和歌・俳句を整理した結果、次のことが推測できる。

- ・多くの和歌・俳句において、川に生息する生物を詠い込んでいる。例えば、水生植物である薦や葦、水辺の鳥である水鶏や千鳥、氷魚などがそれである。すなわち、かつての川の姿を語る時に、これら生物が川特有の景物となって多くの歌人・俳人の心を捉えたのであろう。
- ・飛鳥川などに見られるように川の瀬淵や州といった微地形も歌人の心を捉えたようである。それらは移ろい易さ、人の世の無常をあらわすキーワードであった。
- ・川の清冽な水も歌人をひきつけるものであった。それらは花や紅葉を流し、あるときには月を映して歌人の心を捉え、詠み込まれていった。その一方で、淀んだ水も、また人の深き心をあらわして詠み込まれていった。
- ・川の下流部に広がる湿地には、あやめや杜若といった水辺の花が咲きほこり、歌枕として成立していったものもある。しかし、それらの大半は、後世にたずねていった歌人たちに見出されることなく、変遷していく湿地環境を反映している。
- ・河岸の風景も歌人・俳人の心を捉えたようである。石川啄木の歌にあるように、そこには故郷があり、また、人を感動させる景物があった。

3-2 人と川との関わり

日本人は、稲作を中心とする生活から、川の恵みに対して感謝の念を抱きつづけてきた。しかし、川の和歌・俳句を整理する中では、稲作の風景がそのまま詠み込まれていることは少なく、鵜飼などの漁や、筏流しをはじめとする舟運、芦刈の風景などが多く詠まれている。

また、街道が整備され、旅人の行き来の多くなった江戸期以降は、渡河の苦勞などが多くの俳句として残されるようになった。

これらは、川を憩いの場として捉えているだけでなく、生活の場、地域や聖と俗の境界として、川と関わってきた結果であろうと考えられる。

すなわち、かつては川がさまざまな生活の場面に、常に密着していた結果であろうと思われる。

4. まとめ

和歌・俳句に詠みこまれている川は、かつての豊かな自然環境や生活と密着した河川の姿を浮かび上がらせた。それは現代に生きる我々が取り組んでいる、自然再生や川に学ぶ社会の実現と根底を一つにするものであると言えよう。

そういった意味で、我々河川技術者はかつての川の姿を探り、人々との関わりを取り戻す過程の中で、これら和歌・俳句に表現されてきた川の姿を読み取り、河川管理のヒントを見出すことが必要となるのではないだろうか。

これら文化や文学の観点から川を捉える取り組みは緒についたばかりであり、更なる検討を要するところであるが、平成15年3月に開催される世界水フォーラムにおける紹介を目指して、現在も引き続き調査研究を継続している。

なお、本報告は、近畿地方整備局ならびに中部地方整備局、東北地方整備局発注の業務成果をもとに取りまとめ、紹介したものである。

<参考文献>

- 1) 片桐洋一著：歌枕歌ことば辞典増訂版、笠間書院、1999
- 2) 西沢正史編：古典文学の旅の事典、東京堂出版、2001
- 3) 中西進著：万葉集 全訳注原文付、講談社、1990
- 4) 西沢正史編：古典文学の旅の事典、東京堂出版、2001